

林業・狩猟技術と人的ネットワークが森林資源の持続的利用に果たす役割に関する研究

東京農工大学共生科学技術研究院 福田 恵

1 課題と方法

本研究の目的は、一連の森林資源問題（森林荒廃および鳥獣被害）が発生する直前の林業及び動物の社会的利用システムを明確化する点に置いた。従来の研究では、狭い地域領域（集落、自治体など）の森林資源の社会的利用システムに焦点が当てられたが、ここでは、木材伐採と狩猟に関する専門技術の担い手ないしは担い手同士の各地への移動歴や関係構築、技術波及に焦点を当てることによって、広域的ネットワークの観点から、森林資源の持続的利用に迫った。

広域的な森林資源の利用システムを明らかにするための調査としては、機縁法（ある情報提供者の知り合いを辿りながら人間関係の広がり把握する調査法）を採用した。従来の定点的な地域調査に終始するだけでは、広域にわたる人的ネットワークが把握できないためである。主たる調査地は、【表1】の通りである。

2 林業調査——経過と結果

林業資源に関わる主たる調査対象地としては、兵庫県香美町と富山県南砺市を取り上げた。すでに平成18年度には、兵庫県香美町香住区香住、三川調査、鳥取県森林管理署（旧営林署）調査、兵庫県宍粟市山崎町、一宮町調査などを調査し近隣地域のネットワークの状況を把握しており、平成19年度には、富山県富山市八尾、南砺市利賀村調査、岐阜県朝日村調査、兵庫県香美町秋岡などの調査を実施していた。その結果、富山市、南砺市利賀村と兵庫県香美町が強い繋がりがあることが明らかになったため、本研究では、その人的ネットワークの形成プロセスと技術移転の内容を具体的課題に定めた。

兵庫県香美町村岡区山田の山林（主として国有林）において、伐採・運搬作業の中心となっていたのは、富山県南砺市利賀村百瀬川の専門的技術を有した林業グループであった。

この林業グループは、集落内における複数のグループの内の一つであり、集落全体（および近隣地域全体）で全国の方々に、作業現場（出稼ぎ先）を抱えていた。このグループは、全国の林業専門家とも関わりを持ち、現場に関する情報交換と技術移転の一つの要となっていた。岐阜飛騨から伝わった情報を元に、兵庫県北部の当該地域に赴き、山林伐採と運搬に従事し、周辺住民に高い林業技術を教示した。技術の具体的内容は、ブナ等の大径木を数人で伐採し、独自の橈技術やシュラ出しによって運搬する方法であった。

富山の専門技術者との接触により、兵庫県北部では、大径木の伐採技術および林業労働のグループ化が一部住民によって導入、実践された。伐採後に大規模な造林がなされ、調査地域一帯は、兵庫県随一の林業地域へと変貌を遂げるが、その一背景には、外部の専門的な技術者の存在があったと言える。

【表1】 主たる調査地と採用した調査方法

調査対象	調査地域	調査地 同士の 主要情 報網	調査手法	インフォーマント・調査機 関
林業	兵庫県香 美町	●	区所蔵資料収集、各世帯所 蔵資料収集、インタビュ ー、写真収集	区長、元区長 造林経験者、伐採・運搬経験者、 炊き出し班
	富山県富 山市およ び南砺市	●	各世帯所蔵資料収集、イン タビュー、写真収集	区長、元区長 伐採・運搬経験者
狩猟	島根県安 来市	●	関連機関（県庁、市役 所、猟友会など）の資 料収集、インタビュー	行政担当者、狩猟者、集落 住民
	兵庫県篠 山市	●	関連機関（県庁、市役 所、猟友会など）の資 料収集、インタビュー	行政担当者、狩猟者、集落 住民

2 狩猟調査——経過と結果

狩猟については、島根県安来市と兵庫県篠山市を主たる調査地に据えた。ともに猪の捕獲量が全国随一の地域であり、後者はイノシシ肉の一大消費地、流通基地に成長した地域、前者はそのイノシシ肉の最大供給地島根の一地域であった。

島根県安来市では、狩猟グループの拡大プロセスを明らかにするために、狩猟経験者に機縁法的な調査を試みた。その結果、1970年頃までは、鳥（キジ、カモなど）やウサギ猟が中心であり、狩猟者は各地域に分散しており、時折小グループを形成するに過ぎなかった。その後、1980年代前後に、イノシシが出現するに伴い、狩猟者は、小動物確保の狩猟技術をイノシシ確保のための狩猟技術にアレンジ（猟銃、猟犬の改良など）し、狩猟のグループ体制も小集団の統合ネットワーク化（ないしは離合集散的なネットワーク化）を図った。また、捕獲されたイノシシ肉は、周辺の料亭や食堂、有力者等に対して高値で売却された。

イノシシ猟拡大の背景として、流通拠点となった兵庫県篠山市の存在が無視できないことが明らかになった。同市には、全国一のイノシシ肉販売店（兼集荷、冷凍、卸業）が数軒あり、関西を中心としたイノシシ肉文化を根底で支えていた。明治期以降形成された篠山の流通体制は、1980年前後、イノシシ肉資源の枯渇にあえいでおり、西日本、特に中国山地にイノシシ肉を求めた。中国山地には、複数のイノシシ関連業者、犬業者がおり、独自の情報網と関係網を確立しており、先述した安来市のグループの一員とも繋がっていた。島根及び中国山地における狩猟ネットワークは、地元のイノシシ肉の取引や食文化と共に、篠山を拠点としたイノシシ肉の消費及び流通網を支えてきたといえる。

3 結論

森林資源の持続的利用システムの構築は焦眉の課題である。現在このシステムは、狭い範囲の地域集団によって支えられるという点を一つの重要な論点としている。

基本的には、ローカルな地域集団は無視できないものの、本研究で論じた、それを超える広域にわたるインフォーマルな人と人の繋がり、すなわち人的ネットワークも軽視できない。本研究で取り上げた、専門技術者の集団やネットワークは、木材の伐採、動物の狩猟を通して、資源の減少・枯渇を誘発する可能性もあるが、林業においては造林と共に伐採も資源循環の重要な一角をなしており、動物資源の面では、動物の保護ばかりではな

く、狩猟を含む個体調整が資源管理の要となってきた。

今後、森林資源の持続的利用システムを再構築する際、在地の林業技術・狩猟技術の見直しと、それを移転し媒介する「人的ネットワーク」は欠かせない要素になると考えられる。